

ユダヤ・イスラエルに思う⑫ 聖書の中のユダヤ人差別

長谷川 修

聖書の正典四福音書（マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネ）によると、イスカリオテのユダは、一二使徒の一人であり会計を担当していた。師イエスを裏切り、銀貨三〇枚と引き換えにイエスをユダヤ人祭司長に引き渡した人物として、聖書中最大の悪役であり悪魔サタンとも見なされた。後世の西洋の芸術家は、イエスが弟子の裏切りを予告する「最後の晩餐」や捕えに来た兵士たちの目印にと師を抱く「ユダの接吻」の場面等を、多くの作品に残した。

五番目の福音書が現れた。一九七八年エジプトの洞窟で発見された『ユダの福音書』は、パピルスにコプト語で書かれており、三世紀前半の写本とされる。文書は発見後、古物商たちの間を転々と渡るなど紆余曲折があったが、修復チームの懸命の努力によって、欠落や落丁があるものの、二〇〇六年全文が公開された。

『ユダの福音書』については、二世紀末にリヨンの司教イレナイオスが書いた『異端反駁』で異端「グノーシス派」の書として言及されており、存在は知られていたもののその内容は、一七〇〇年後の二二世紀になって初めて明らかになった。

この外典福音書に描かれたユダは正典四福音書とは全く異なる。ユダはイエスを裏切ったのではなく、イエスに命ぜられて当局に引き渡したとする。ユダはイエスから全ての弟子たちを越えた者として信頼されており、ペトロに連なる正統派教会によって罪を一身に背負わされたユダの復権をはかっている。

ユダとは、ユダヤ人の間ではよくある由緒正しい名前（聖書の中では異なる九人のユダがいる）であるが、イスカリオテのユダだけが突出してイエス殺しの汚名をきせられた。また、正典福音書の記者たちは、ローマ帝国でのキリスト教弾圧の厳しい時代に、イエスの十字架刑を決めたのは、ローマ人総督ピラトではなくユダヤ人大祭司カイアファであると記した。

大戦中のヒトラーによるユダヤ人六〇〇万人の虐殺は、原始キリスト教成立期に淵源を持つと思うが如何だろう。